

## 修道神学者トマスと今日の神学的実存

森本 あんり

一九三〇年秋、ニューヨークのユニオン神学

校へ留学したデイトリヒ・ボンヘッフアーは、ある若いフランス人牧師と出会って話すうちに強い衝撃を受けた。自分の将来に何を望むかという話になった時、「僕は聖人になりたいのだ」と彼が言ったからである。若きボンヘッフアーは、その言葉に圧倒されつつも一抹の抵抗を覚え、「自分は信じることを学びたい」と答えたが、その対比に思いを巡らせ続け、結局「みずから聖なる生活を送ることにより、信じることを学ぶ」という道を選ぶことになった。

稲垣良典著『トマス・アキナスの神学』が描き出すトマスは、わたしのプロテスタント的な理解ではこのような道を歩んだ人ということになる。同書によると、トマスは神学者であると同時に修道者であり、『神学大全』は大学で営まれる「スコラ神学」とは異なる「修道院神学」の所産として理解されるべきである。神学は、何よりもまず「信仰の知解」であり、「教える神」に聴従する信仰によって成立する学である。その主題たる神は、自然的理性によって

到達しうる存在ではなく、神ご自身によって啓示される以外に知ることができないので、神学とは神がご自身についてもつ知に近づくことであり、徳としての信仰という「聖性」を与えられることなしには不可能な学である。トマス以後の神学は、一方では神秘神学や靈性神学へ、他方では実証的な聖書研究へと二極分解してしまいが、神学の究極目的は人間存在そのものの究極目的でもある神性への参与（神化）に他ならないことを示したのが、修道神学者トマスであった。

ボンヘッフアーもまた、みずから「聖人」となつて「信じることを学んだ」神学者である。トマスが修道僧といつても政治や権力の闘争と無縁ではなかったように、ボンヘッフアーの「聖性」も時代と世界への徹底的な関与に縁取られつつ表現された。彼がフランス人牧師との会話を記したのは、その一三年後のことである。すでに捕らえられて獄中にあつた彼は、極秘に計画していたヒトラー暗殺が失敗に終わったことを知らされ、自分がまだ生きていること

を仲間伝えるため、その翌日にこの書簡をたたためたのである。そこで彼が展開したのが、キリスト教の「この世性」(Disseitheit)をめぐる議論であつた。聖書の伝えるイエスは、洗礼者ヨハネのような「宗教的人間」ではなく、端的に「人間」である。だからキリスト者も、卑俗に墮すことなく世俗を引き受け、責任をもって「成人した世界」を生き抜かねばならない。ここに、プロテスタント的な敬虔(レリギオ)のひとつのあり方が示されている。

著者が描く修道神学者としてのトマス像には、わたしも圧倒的な魅力を感じる。キリストの愛への応答に貫かれて祈りつつあの大著を書き続け、まさにそれが完成せんとする直前、聖体ミサの最中に「信仰よりもより大なる知」の啓示を受けて筆を絶ち、その三ヶ月後に生涯を終えたトマスに、見神の至福直観という神学的営為の本源を想う。しかし同時に、その姿が輝けば輝くほど、トマスはわれわれから遠く隔たつて煌めく星のような存在となり、われわれを導く光としては霞んでしまふ。トマスを研究することは、現代日本の神学的実存とどこでどのようにに接合するのであろうか。著者の言うように、神学が信仰と献身を必須の前提とする学であるならば、それは神学校や修道院には属しても、信者でない学生を含む日本の大学には適さないであろうし、まして国立大学の講座では看板を偽らぬ限り不可能であろう。

一三年前に同著者による『神学的言語の研究』(創文社)を書評した際にも、同様の魅力

と困惑を感じた（『日本の神学』三九号）。当時書評を依頼してきた学会誌の編集委員会は、「中世思想の専門家でない」誰かの書評を求めていた。今回のわたしにも同様の役回りが期待されていた。こうした企図は、対象図書の高度な専門性を示すだけでなく、その評価が仲間内だけの閉鎖的なものに終始することへの懸念も示している。学術書の書評である以上、この懸念は正当である。専門性が高ければ関与できる人数が限られるのは、ある程度はやむを得ないかもしれない。しかし、それは解決できない問題ではない。著者を含む日本のトマス研究は疑いもなく高度な学問的水準にあるが、残念ながら国外では発言が少なく、認知もされていない。著者は、たとえばジルソンやマリタンに多くを学んでいるが、三位一体論の理解においてはラーナーにやや批判的である。このような議論は、国内にいるひと握りの読者を相手に出版を重ねるだけでは、評価も検証もされることがなく、反論も共感も得られないままである。今後はこのような優れた研究が海外でも広く共有され、やがてその成果が日本にも還元してわれわれを益し導いてくれるようになることを切に願いたい。

実は、本書には狭い研究者の輪から一歩外へ出ようとする著者の努力もうかがわれる。トマスが「天使の博士」であるだけでなく、カトリックとプロテスタントに「共通の博士」である、という指摘はその一つで、わたしもこれには深く共感する。著者はすでに一九七七年に、スコ

ラ学の中でトマスが「巨大な虚像」へと変容させられてしまったことを指摘しておられる。トマスは、トリエント公会議では護教論的な典拠の役割を担わされたため、本来の文脈を捨象して読まれることになったが、今日では宗教改革期の神学論争にもこの「虚像」が深く影を落としたことが知られている。ルターやカルヴァンは、直接トマスを読んでいたわけではない。彼らの著作につけられた注は、読者の利便性を考えた後代の注解者がトマスから参照箇所を拾い出して付加したものが少なくない。もし宗教改革者たちが自分で『神学大全』を読む機会があったなら（それもできれば本書を脇に置いて参照しつつ）、論争や対立はずっと穏やかで微妙なものになっていたことであろう。残念ながら、こうした「虚像」のトマスは、バルトの無理解に基づいたアナログア論批判にも見られたように、現代でも完全に消えてなくなったわけではない。

一方、虚像ではなく実像の方のトマスは、プロテスタント神学にも直接間接に大きな影響を及ぼしている。恩寵と自由意思をめぐる一六世紀末の「助力 *de auxiliis* 論争」（二七頁）は、同時代の改革派正統主義者やピューリタン神学者が多大な関心をもって汲み取ったトマスの水脈の一つである。本書にも信仰が徳であることと賜物であることとの矛盾が論じられているが、プロテスタント神学はこの点でもトマスを継承し、その豊かな内容と柔軟で的確な用語を摂取した。義認論や救済論の領域では、カトリ

ック教導職が是認するしなにかかわらず、神学者間の実質的な協議が始められてすでに久しい。こうしたカトリックからプロテスタントへの神学的な連続性の背景に「実像」トマスの貢献があることを知るのは、専門の研究者ならずとも嬉しいものである。

「共通の博士」トマスを強調する著者の努力は、巻末に付された「用語解説」にも見て取ることができる。通常なら無難で平板な教科書的解説の寄せ集めに終わるはずの各項目に、本書では著者の解釈を大胆に打ち出した論争的な内容が盛り込まれており、それだけで興味深い読み物となっている。ただ、それにしては本論でも対論者の提示がやや一面的で、トマスとの対話が十分に成立しているとは言いがたい箇所もあるように思われた。トリエント公会議における「アナテマ」条項がルターの神学的主張を正当に概括しているかのような論述は、その同じ公会議でトマスがどのように扱われているかを指摘した後では、とりわけ不適切に響く（三五四頁）。ニグレンの著作は一九三〇年代のもので、トマスの神学はその後さまざまに展開をみたアガペー論の中でこそ論じられ弁明されねばならない（一四六頁）。フォイエルバッハの無神論に対して著者がトマスから引き出す解答は、フォイエルバッハの批判をまったく素通りしている（三〇頁）。近代の啓蒙主義やそれがもたらした人間中心主義に対する著者の批判にはわたしも心から賛同するが、それらと正面から対峙するには、トマスとは別の資源や準備が

必要かもしれない。問いのないところに答えは生まれなからである。三位一体論におけるベルソナの実在的区別を「信仰のみによって肯定される神秘である」としながら、それが「けつして理性に反するものではない」というのは（四九頁）、「不可能なことがならぬこと」の言い換えと思われるが、はたして大方の読者に納得してもらえるかどうか。これはロックの「理性を越えること」と「理性に反すること」という区別を想起させるが、理性を越えるならば理性に反するか反しないかは理性では判断できない、というカントの理性批判を乗り越えることができるように思われる。

著者はしばしば、トマス自身にも矛盾や不可解さがあることを率直に認めておられる。にもかかわらず、いやまさにその故に、そうした矛盾や不可解さを何とかして突き抜け、その背後にあるラチオを理解しようとする著者の真摯な姿勢には、研究者として心打たれるものがある。トマスが不可解な言葉を残しているところには必ず何らかの理由があるに違いない、という確固たる信念があればこそその探求であるが、その信念を共有しない者にとり、これは著者が今日の問いかけを十分に受け止めていないのではないか、という疑念を引き起こすかもしれない。たとえば創造論における神義論の解釈（第二章）は、トマスの議論の首尾一貫性を示すという点では成功しているが、かりにこれがトマスの神義論の全体であるとすると、神義論そのものとしてははなはだ未発達なものであること

になる。使徒パウロは、たしかに「善をもって悪に勝ちなさい」という個人的な勧めを残しているが、同時に「被造物全体が呻いている」という宇宙論的な悪の存在をも認識していた。われわれが対話すべき現代の聴き手は、個人の倫理や態度決定では到底間に合わないような次元での神義論を求めている。それに答える手があるのは、パウロやおそらく現代のトマス研究者にはあるようだが、著者に教えていただく限りでのトマスには見当たらないように思われる。

他方、本書はトマスが現代の問いに対して予想外の視野を開くことも教えてくれる。従来「神の存在証明」とされてきた「五つの道」が、近代以降の「証明」概念とはまったく別物で、もっぱら神の存在が神の本質と不可分であることを示す議論であったという指摘は、現代神学の観点からしても有意義である。宗教学の観点からは、トマスの *religio* 概念が興味深い。日本語で「宗教」と訳されるこの言葉は、そもそも聖書にもコーランにも仏典にも登場せず、西欧諸言語でも複数形が長く存在しなかった。スイスの宗教改革者ツヴィングリが『真のレリギオと偽りのレリギオ』を著した時、彼はキリスト教が真で他宗教は偽だと論じたのではなく、キリスト者にとつて真の敬虔とはどういうものかを論じたのである。宗教とは特定の信念体系の総称であり、信仰とはこれを命題的に承認することだとする狭隘な理解は、無宗教を標榜する啓蒙主義以降の近代人にこそ蔓延しているもので、「共通の博士」トマスはここでも今

日的な課題を担って共同前線に立ちとうとする者に大きな力添えとなる。

専門外の素人という立場をよいことに、学問と信仰の大先達である先生に失礼千万なことを申し上げてしまったことをお許し願いたい。それにしても、教会の歴史の中で「神学者にして聖人であった者はほとんど存在しなかった」というバルタザールの言葉（八頁）は、よく考えたと笑える。どうやらわたしも、トマスであるとボンヘッファー的であるとを問わず、とても聖人にはなれそうにない。

（もりもと・あんり 国際基督教大学教授／神学）

森本あんり 著

『アメリカ的理念の身体』 五二〇〇円

『人間に固有なものとは何か』（編著） 三〇〇〇円

『アジア神学講義』 三八〇〇円

『ジョンナサン・エドワーズ研究』 八五〇〇円